

3 徳島の経済の始まりは藍産業から

●徳島市は全国10位の大都市だった

古代の徳島は、少なくとも粟国あわのくにと長国ながのくにが成立していたことは確かですが、大化の改新（645年）によって併合され、国名を2文字とすることとなったことから、粟を阿波と表記するようになりました。

江戸時代は、一国の経済力を石高こくだか（米穀の収穫量やそれに換算した田畑の生産力、1石は成人男性が1年間に消費する米の量。10000合）、つまり領地高で表現していましたが、徳島藩は石高25万7000石と全国で17位、四国最大の規模を誇りました。ただし、淡路島も徳島藩に属していたので、石高のうち約8万石は淡路島です。

しかし、25万7000石は表石高おもてこくだかと呼ばれる数値で、実際には商品作物による産業活動が活発に行われていたことから、実質石高は約50万石とも言われていました。これは、

吉野川流域の阿波藍、鳴門の塩、阿讃山麓あさんざんろくの阿波和三盆糖わさんぽうとう、吉野川上流山間部のたばこや和紙、那賀川や海部川流域かいふの木材、山間部の茶などからもたらされたものです。

徳島の町は明治から昭和の初期まで、江戸時代より続く藍で蓄えられた豊かな民間財力を背景に、活気のある都市だったのです。

ちなみに、1889（明治22）年に市町村制を施行した当時の都市人口をみると、徳島市は約6万人で、東京・大阪・京都・名古屋・神戸・横浜・金沢・仙台・広島に続く全国10番目の大都市でした。

●徳島藩の財政を支えた阿波藍とジャパンブルー

吉野川はその昔、坂東太郎（利根川）や筑紫次郎（筑後川）とならび、四国三郎と呼ばれる暴れ川でした。吉野川流域は、洪水の影響で米作が困難な一方で肥沃な沖積平野を形成していたことから、平安時代より藍の栽培が始まったと言われています。

江戸時代になると全国各地で木綿生産が拡大するなか、徳島では藩主である蜂須賀公により阿波藍の生産が奨励され、染料としての阿波藍生産も増加しました。

阿波藍は質、量ともに日本一を誇り、藍以外の染料が乏しかったことから全国の染料市場を席巻し、地元にはく大な富をもたらしました。そして隆盛を極めた藍商人から上納される運上金（各種産業に対し一定の税率で課した税金）や冥加金（特定の営業免許などの代償として支払う金銭）は、有力な財源として徳島藩の財政を支えました。

また、藍の取引は大坂の間屋が主導権を握っていたのですが、徳島藩は間屋機能を徳島の有力商人に集中させるとともに金融機能も強化し、官民一体となって新たな生産・流通システムをつくり出し、もうかる仕組みを構築していきました。

現在の徳島市藍場浜には藍倉が立ち並び、年に一度の市は、全国から商人が集結したことで交流人口が増大し、藍商人を最大のスポンサーとした文化の発展に寄与しました。また、同じく藍でにぎわった協町には今もうだつ（江戸時代の商家などで隣家との境に設けた小屋根付きの袖壁そでかべのことで、装飾と防火を兼ね、財力の象徴にもなっていました）の町並みが残っており、藍商人の隆盛は「うだつが上がらない」（地位や生活が向上しない）ことの語源になったとも言われています。

全国の長者番付の上位に名を連ねた藍商人の久次くじ米兵次郎ひょうじろうは、現在の阿波銀行の前身にあたる久次米銀行を1880（明治13）年に設立しました。資本金



うだつの町並みとうだつ ©美馬市

は50万円で、当時は三井銀行に次ぐ全国第2位の大銀行でした。

また、政界にも進出していた藍商人の大串龍太郎おおくりりゅうたろうは、徳島電灯株式会社を設立し、1895（明治28）年1月に四国で最も早く街に灯りをともしました。さらに徳島鉄道株式会社を設立して1889（明治22）年に徳島―鳴島間を開通させるなど、徳島の発展に大きく貢献しました。徳島市の東新町も鉄道を利用して郡部から多くの人が集まるようになり、賑やかな繁華街へと様変わりしました。

小松島港も元は藍商人たちの手によってつくられた港でした。国や県に代わって公共事業を担い、産業の近代化に力を注いでいったのです。

しかし、安い外国産の藍や化学染料に押されて、国産藍は1903（明治36）年をピークに生産が激減していきました。危機感を感じていた藍商人たちは、藍に代わる産業を模索しましたが、残念ながら藍に匹敵するほどの地域を支える産業は生まれてきませんでした。でも、後で述べるように、藍をルーツとして育ち現在に至っている企業も数多くありますし、藍商人の精神は今も脈々と地域に受け継がれています。

この後、藍は衰退の一途をたどり復活することはありませんでした。しかし、最近になって優美な色彩が評価されていることに加え、古くから薬草としての効果が知られているほか、保湿性などもあることから、染料としてはもちろん、衣食住にわたって多様な用

途に利用できる可能性があります。

東京オリソピック・パラソピックのエンブレムは「日本の伝統色」である藍色で描かれています。今こそデザイン性を取り入れ、世界に誇るジャパンブルーがクリエイティブな産業として活性化するチャンスと言っていていいでしょう。

●製糖（阿波和三盆糖）

阿波和三盆糖って聞いたことがありますか。まろやかで独特の風味があり、和菓子業界では最高級の国産糖と言われています。価格はやや高いのですが、洋菓子はもとより料理の味付けなどさまざまな用途に使われています。

徳島で甘庶（かんしよ）（さとうきび）の栽培が始まったのは、1776年に日向延岡（ひゅうが）から苗を持ち帰って以降ですが、藩の奨励もあって砂糖の生産量は拡大の一途をたどり、藍に続く商品作物となりました。徳島藩は砂糖を専売化し、ばく大な収入を上げていました。

ところが、国産の砂糖は明治になって輸入品に押され始め、明治中期からは植民地となった台湾から大量に移入され、壊滅的な打撃を受けました。徳島の製糖業も同様でしたが、高級品として珍重されたことだからうじて生き残り、今また見直されようとしています。

●鳴門の塩

1599（慶長4）年に、播磨の国（兵庫県）から、潮の干満を利用して海水を自然に塩田に入れる、入浜式塩田が伝わりました。塩田の草創期に、徳島藩は手厚い保護政策を実施したことから塩田は急速に広がりました。特に、鳴門市の撫養地区でつくられる「齋田塩」は、良質で産出量も多く、全国的に知られました。

1905（明治38）年には生産量や販売価格を国が管理し、安い外国産の塩から国内の塩業を保護することと、塩の販売で日露戦争の軍事費を調達することを目的として、国が販売する専売制に移行しました。なお、その頃には生産量が全国の約1割を占めるほどになっていました。

1955（昭和30）年前後から、海水をポンプで汲み上げ、下に流していく過程で太陽熱や風によって水分を蒸発させる流下式への転換が実施され生産性を高めました。一方で、塩の過剰生産が問題となった



流下式塩田 ©鳴門市

ことから、政府は全国の塩田を縮小していききました。特に1959（昭和34）年から行われた塩田整備では、全国の4割の塩田が廃止されました。技術革新が逆に塩業家を苦しめるようになったのです。鳴門の塩業家も生き残りをかけて生産調整を行いました。その後、電気エネルギーを利用して真空式蒸発缶で煮詰める、イオン交換膜法と呼ばれる塩田を必要としない製塩技術が開発され、塩田の役割はなくなりました。

そしてついに1972（昭和47）年、鳴門のすべての塩田は廃止となって塩田労働者も浜から姿を消し、約400年にわたる歴史に幕を下ろしました。

その後、新しいイオン交換膜法による製塩業は、政府の方針により全国で7つの会社に限定されました。その一つが鳴門市撫養町の鳴門塩業（株）です。

なお、鳴門では塩が豊富にあって砂糖が珍重され、特別な日は砂糖を使ったことから、赤飯にゴマ砂糖をかけて食べる習慣が今でも残っています。

●阿波の刻みたばこ

タバコの栽培は山間へき地の傾斜地に適しているため、三好や美馬といった西部で盛んに生産され、江戸時代より品質の良さから「阿波刻み」のブランド名で全国各地に向けて販売されてきました。明治期になっても、たばこ産業は政府の専売制にも支えられて、確

固たる地位を築きました。

しかし、1904（明治37）年に始まった日露戦争のばく大な戦争費用をまかなうため、政府は葉たばこの製造も行うことにしました。もし、政府直営の製造工場がどこか別の場所に設置されるようなことになれば大変な事態です。

そこで、上水道や学校などのインフラを整備して、直営工場の設置を促しました。その甲斐もあって池田に専売工場が設置され、煙草の職人はそこに吸収されました。

●徳島に息づく伝統と起業の精神

徳島では、藍商人の「永代取引」（目先の短期的な利益を求めめるのではなく世代を超えた息の永い取引を継続し、永続的な発展に寄与していくという考え方）「てうちかぎり手拍限」（巨額の取引にも契約書を交わさず、一度の手打ちによって取引を成立させる信用重視の取引）の精神を受け継ぎ、新しい時代を切り開くさまざまなビジネスが生み出されました。

現在の徳島を代表する老舗企業には、藍や塩を起源とするものも少なくありません。また、藍栽培で培った有機肥料のノウハウは、広く農業の振興に息づいていますし、徳島藩水軍の舟大工が蓄積した木製品加工技術は、家具や仏具製造に生かされてきました。これらの伝統や起業の精神は脈々と受け継がれ、現在においても新しい産業の創出につな

がっています。

特に有力な藍商人であつた西野家、三木家、森家をルーツとするのが、西野金陵(株)、三木産業(株)、森六ホールディングス(株)です。

西野金陵(株) (本社：香川県仲多度郡琴平町) は、藍に始まる歴史から化学製品を取り扱うとともに、こんぴらさんで有名な金刀比羅宮の御神酒をつくっている酒造会社としても知られています。

三木産業(株) (本社：東京都中央区日本橋、総本店：徳島県板野郡松茂町) は、液晶材料や有機EL色素などの原料や中間体を取り扱う化学品の専門商社です。

森六ホールディングス(株) (本社：東京都港区南青山) は、自動車用樹脂部品の製造・販売や、化学商社として事業を展開しています。